# 令和７年度　第２回
# 焼津市認知症対策連絡会議

## 資　料

令和７年12月17日
焼津市地域包括ケア推進課

根拠法令：介護保険法第115条の45第２項第６号

## 次第４　議題

### （１）認知症施策推進計画策定について

### ア　認知症に関するアンケート調査の結果について

※調査結果は別紙参照

# アンケート調査からの考察（全体、問１～５）

**【アンケート全体について】**

- 回答者を300人を目標に本アンケートを実施したが、想定を上回る1,615人から回答があり、アンケートの精度が高まった。
- ＬＩＮＥ配信を行ったことにより、幅広い層の人から回答をもらうことができたと思料。
- 回答数から考えると、市民の認知症への関心が高いことが感じられる。

**【基本情報：問１～５】**

〇問４「認知症の人と接したことがありますか。」

・「ある」と回答した人が80%と高く、高齢者が増加する中で認知症高齢者の人と接する機会が増加してきていると考えられる。

〇問５「どのような場面で認知症の人と接したことがありますか。」

・「家族の中に認知症の人がいる（いた）」（50%）、「親戚の中に認知症の人がいる（いた）」（32%）との回答があり、身内で認知症の人と接する機会が最も多い。

・また、「近所付き合いの中で、認知症の人と接している（したことがある）」と回答した方も25%と４番目に多く、今後単身高齢者などを近所同士で支えていく必要が出てくるため、この選択肢の割合が増加していくことが考えられる。

# アンケート調査からの考察（問６、７）

**【認知症に対しての知識・情報】**

〇問６　「認知症について、どの程度理解していますか。」

・「よく理解している」（12%）、「ある程度理解している」（73%）と、認知症についての基本的な知識がある人が８割強と多かった。認知症サポーター養成講座や講演会では、講座の内容を基礎的なものに加え、より専門的な視点も交えて行うことも効果的であると考えられる。

・「年齢」とのクロス集計（P５）では、20～29歳が他年代に比べ認知症への理解度が低いことがわかった。社会人となる20代以降は、専門職以外は認知症と接したり、知識を習得する機会が少なくなるためと考えられ、生徒・学生のうちに基礎的な知識を習得できるよう、中学校や高校、大学等と連携し、認知症サポーター養成講座等を実施していく対策が考えられる。

〇問７　「認知症について何から情報を得ていますか。」

・「テレビ・ラジオ」（59%）が最も多かった。「インターネット・ＳＮＳ」「新聞・雑誌」を選択した方が次に多かったため、市のホームページにおける認知症のページを分かりやすくすること、広報における認知症普及啓発を進めていくことが必要と考えられる。

・「年齢」とのクロス集計（P６）では、20代～50代は「インターネット」から情報を得ている人の割合が多いため、市ではホームページやＬＩＮＥ配信での情報提供、民間事業者はそれぞれのＳＮＳ等での発信により情報発信していくことが効果的と考えられる。

# アンケート調査からの考察（問８～12）

**【認知症の予防・治療について】**

〇問８　「認知症は予防できるものだと思いますか。」

〇問９　「認知症の治療に関してどのように思いますか。」

・問８では「予防できる」（56%）、問９では「治療すれば、進行を遅らせることができる」（90%）との回答が多く、市民に認知症と医療との関係性については、浸透しているものと考えられる。

**【認知症のイメージについて】**

〇問10　「認知症になったら、それまで好きだったこと（趣味など）を楽しめなくなると思いますか。」

〇問11　「認知症になったら、仲間や知り合いと交流できなくなると思いますか。」

・問10、問11のどちらも約半数の人が、「楽しめなくなる」「できなくなる」に対し、「そう思う」か「どちらかといえばそう思う」と回答があり、「新しい認知症観」の市民啓発において、前向きに生活されている認知症本人の生の声などを伝えていくことの必要と考えられる。

・ 問６「認知症の理解度」とのクロス集計（P9）では、認知症を「よく理解している」人ほど、「楽しめなくなる」「できなくなる」に対し、 「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」と回答した人が多く、認知症の理解度を高めることは、「新しい認知症観」の普及につながるものと考えられる。

〇　問12の「認知症の人はすぐ忘れてしまうので、丁寧に伝えたり説明しても意味がないと思いますか。」

・「どちらかといえばそう思わない」（29%）、「そう思わない」（51%）と、約８割が、認知症の方への丁寧な接し方において、基本的な姿勢は理解しているものと考えられる。

# アンケート調査からの考察（問13、14）

**【若年性認知症について】**

〇問13　「40代や50代など高齢でない人でも認知症になる可能性があることを知っていますか。」

・「知っている」と回答した方が96%であり、若年性認知症の認知度が高いことが分かった。

**【認知症の相談先について】**

〇問14　「ご自身や家族が認知症ではないかと不安を感じた時、まずどこに相談すると思いますか。」

・「医療機関」を選択した方が最も多く、認知症支援にあたり、まずは医療機関での診断を受けてもらうことが重要であることから、市民に適切な認識が広がっていると考えられる。
・より医療機関への相談が入りやすくなるよう、認知症疾患医療センターやサポート医等の周知を進めていくことが大切である。
・また、「地域包括支援センター」を選択した人が、３番目に多く（「家族・親族」の次）、こちらも更なる周知を進める必要がある。
・「年齢」とのクロス集計（P12）では、40代以下は相談先として「地域包括支援センター」を選択している人が少ないため、勤労世代への周知が必要と考えられる。

# アンケート調査からの考察（問15、16）

**【認知症サポーター養成講座について】**

〇問15　「認知症の正しい知識や接し方を学ぶことができる認知症サポーター養成講座を受講したことがありますか。

〇問16　「認知症サポーター養成講座を受講し、認知症への知識や理解を深めたいと思いますか。」

・「受けたことがある」と回答した方が19%、今後の講座の受講希望に対しては、「そう思う」（14%）、「どちらかといえばそう思う」（54%）と、約７割が受講に前向きであるため、プッシュ型で講座の周知を進めていくことも必要であると考えられる。

・問４「認知症の人と接したことがあるか」とのクロス集計（P16）では、接したことが「ある」人ほど、認知症サポーター養成講座を受講しているため、接した経験がある人は、認知症への知識を深めたいと考える傾向にあると推測される。

・問10「認知症になったら、それまで好きだったこと（趣味など）を楽しめなくなると思いますか」、問11「認知症になったら仲間や知り合いと交流できなくなると思いますか。」の認知症のイメージとのクロス集計（P17）では、受講したことが「ある」人ほど、楽しめなくなる、交流できなくなるに対して「そう思わない」の割合が高く、講座受講の効果が感じられる。

# アンケート調査からの考察（問17、18、19）

**【認知症に関する市の取組の認知度】**

〇問17　「認知症のシンボルカラーは、オレンジであることを知っていましたか」

・「知っていた」と回答した方が31%と低いため、オレンジ色を見たら認知症を思い出すきっかけとなるよう、様々な場（認知症サポーター養成講座や講演会、イベント等）で認知症の理解とともに周知を進めていくことが必要と考えられる。

〇問18　「認知症の人や家族、地域住民などが気軽に集まり、お茶などを飲みながら交流したり、情報交換や相談ができる場である「認知症カフェ」を知っていますか。」

・「言葉を知っている程度」（26%）、「知らない」が５割であり、認知症カフェの増加に取り組む中で、カフェの実施の様子等を発信するなど、周知を図る必要があると考えられる。
・認知症サポーターが、認知症カフェを紹介できるよう、サポーターにもカフェに参加してもらうなどの取組も効果的ではないかと考えられる。

〇問19　「認知症サポーター養成講座を受講した認知症サポーターがチームとなって、身近な認知症の人や家族の見守りや支援を行う「チームオレンジ」という取り組みを知っていますか。」

・「知らない」（69%）であり、チームの増加に取り組む中で、周知していく必要があると考えられる。
・問15「認知症サポーター養成講座の受講の有無」とのクロス集計（P18、20）では、受講したことがある人ほど、シンボルカラー、チームオレンジ、認知症カフェを「知っている」「知っていた」と回答した方が多かったため、講座受講の効果が感じられる。

次第４　議題

（１）認知症施策推進計画策定について

イ　本人・関係機関等のヒアリングの結果について

# 関係機関等ヒアリング　実施状況

| | | | |
|---|---|---|---|
| 概要 | 認知症施策推進計画を策定に向け、施策を検討する上で、認知症の人を支援する関係者から現状や課題、運営課題等を把握することを目的に実施 | | |
| 実施期間 | 令和７年10月～12月 | | |
| 実施方法 | 対面による面談 | | |
| 対象 | 本人２人、関係機関等８人　計10人 | | |
| ヒアリング先 | 機関等 | 担当者 | 実施日 |
| | ご本人（市内在住） | 内山さん<br>鈴木さん | 11月５日（水）<br>12月１日（月） |
| | 社会福祉協議会（成年後見支援センター） | 五十右　直さん | 10月24日（金） |
| | ぺちか居宅介護支援事業所（介護支援研究会） | 大石直子さん | 10月21日（火） |
| | 社会福祉法人　正生会（グループホーム） | 林　綾子さん | 10月24日（金） |
| | 高麓デイサービス　きすみれ（認知症対応型デイ） | 内野　紅さん | 11月７日（金） |
| | 認知症家族会　ひまわりの会 | 小谷幸代さん | 10月22日（水） |
| | 認知症家族会　めぐみの会 | 山中琴恵さん | 10月22日（水） |
| | 焼津市立総合病院（認知症疾患医療センター） | 星野真寿美さん | 10月22日（水） |
| | やきつべの径診療所（認知症疾患医療センター） | 夏苅直己さん | 10月24日（金） |

# ヒアリング項目

## 1　本人への質問

| | |
|---|---|
| 問1 | 認知症と向き合われる中で、日頃の生活で工夫されていることや苦労されていることがあれば教えてください。 |
| 問2（共通） | 認知症の方が地域で生活し続けるために、社会として充実や改善していくべきことは何だと思いますか。 |
| 問3（共通） | 認知症の方の支援にあたり、行政にどのようなことを期待していますか。 |
| 問4 | 焼津市認知症施策推進計画における基本理念（スローガン）について、ご意見をお聞かせください。 |

## 2　関係機関等への質問

| | |
|---|---|
| 問1 | 認知症の人への関わりやサービス提供などの支援において、心掛けていることや工夫されていることは何ですか。また、苦慮していることはありますか。 |
| 問2（共通） | 認知症の方が地域で生活し続けるために、社会として充実や改善していくべきことは何だと思いますか。（共通） |
| 問3（共通） | 認知症の方の支援にあたり、行政にどのようなことを期待していますか。（共通） |
| 問4 | その他、認知症支援の推進に関することで、話したいことや疑問点等思うことなどを教えてください。 |

# 1　本人の意見　問１、問２

| 問１ | 認知症と向き合われる中で、日頃の生活で工夫されていることや苦労されていることがあれば教えてください。 |
|---|---|

【市民理解・地域づくり】
- 地域の人たちは認知症であることを知ってくれているので、安心していろんなことを話せる。

【不安への対処】
- 認知症であるとの認識からは、とても不安であり、それを人に話し、吐き出したいと感じたことがある。

| 問２ | 認知症の方が地域で生活し続けるために、社会として充実や改善していくべきことは何だと思いますか。（共通） |
|---|---|

【本人への相談支援】
- 認知症の人が気軽に立ち寄って話ができる場所や、相談員にアドバイスをもらえたりするような場所があるとうれしい。

【市民理解・地域づくり】
- 認知症はどんな人でも発症する可能性があり、誰でも関わる可能性がある。それぞれの立場の人に理解してもらい、社会全体で認知症の人を支えられたら良い。

【早期把握・早期対応】
- 早い段階で症状を把握することが大事であるため、「まずは検査を受けてみる」という認識が広まることは重要。

# 1　本人の意見　問３、問４

| 問３ | 認知症の方の支援にあたり、行政にどのようなことを期待していますか。（共通） |
|---|---|

【市民理解・地域づくり】
- 若者にも認知症について伝えられる機会があると良い。

【社会参加】
- 自宅でできる仕事をし、多少の収入が得られると良い。

【住まい】
- 自分が住みたいと思った所で、暮らせるようにしてもらえるとありがたい。

| 問４ | 焼津市認知症施策推進計画における基本理念（スローガン）について、ご意見をお聞かせください。 |
|---|---|

- 「安全」、「安心」であってほしい。
- 「希望」とかは肩に力が入るような感じがする。
- 「リラックス」など、リラックスした雰囲気が出ているフレーズのほうが、プラス思考につながると思う。
- 「忘れるようになっても、ちょっと自分に自信が無くなっても、お助けマンがいますよ」、「声掛けてくれて、ちょっと手助けしてくれる人がいる」という言い方だと良い。

# ２　関係団体等の意見　問１－１

| 問１ | 認知症の人への関わりやサービス提供などの支援において、心掛けていることや工夫されていることは何ですか。また、苦慮していることはありますか。 |
|---|---|

【家族支援】

- サービスの枠があっても、費用がかかるため使わない人もおり、家族介護者の負担・ストレスに対して、全てを補うことができないのが現状。
- 認知症の人がサービスの利用を拒否することがあり、拒否されてしまうと次の段階に進めない。
- 支援者側が「なんとかしないと」と思っても、当事者は問題ないと思っているケースの場合には、無理強いをすると逆にストレスを与えてしまう場合があり、関わり方が難しい。
- 家族の疲れ具合や言葉の掛け方によっては、本人に不安を与えてしまう場合もある。支援者が家族の状況を気に掛けることにより、本人が安心して在宅生活を続けられる。

【社会参加】

- 若年性認知症については、50～60代の人が多いため、同年代程度の話し相手を求める傾向があるため、家族会や本人ミーティングの場等につないでいる。

# ２　関係団体等の意見　問１－２

| 問１ | 認知症の人への関わりやサービス提供などの支援において、心掛けていることや工夫されていることは何ですか。また、苦慮していることはありますか。 |
|---|---|

【意思決定支援・権利擁護】

- 成年後見制度を必要とする人数に対する受け皿が追いついていない。市民後見人の養成も時間がかかる。
- 臨床の場においては、治療の方針や選択、介護サービスの提供など、様々なことを決めなければいけない中で、「いかに認知症の人の意思を引き出せるか」が課題。
- できる限りパターナリズムにならずに、共同意思決定（ＳＭＤ※）ができるように努めている。
  ※SMD…Shared Decision Making、患者と医師が協力して医療に関する意思を決定すること

【従事者スキルアップ】

- 人によって認知症の症状が違うことにより、対応やコミュニケーションがうまくいかなかった時の職員のストレス管理に苦慮している。不適切なケアを防ぐために、体験型の研修を実施したり、外部の研修に参加したりしている。

# ２　関係団体等の意見　問２－１

| 問２ | 認知症の方が地域で生活し続けるために、社会として充実や改善していくべきことは何だと思いますか。（共通） |
|---|---|

【市民理解・地域づくり】

- 認知症についての理解が進まないのは、実際に認知症の人と接する機会がないことも要因。子どもの頃からの教育の中の一つに、福祉教育が取り入れられるようになると良い。
- ＭＢＩ（軽度行動障害）は、認知症とまで診断されないが、社会的問題行動が出て、地域の人から排除の対象となってしまい、地域社会から孤立してしまうケースがみられる。地域へより一層の啓発を行い、認知症における症状の理解を深めてもらう必要がある。
- 地域でちょっと面倒をみてくれる人が近所にいると良いが、認知症になってからの関わり始めだと無理があるので、本人が認知症になる前からつながりのある人が地域にいると良い。
- 店舗や企業の協力・理解が広まり、認知症の人が外出する際に、お店等へ気軽に伝え、協力してもらえる関係ができると良い。

【家族支援】

- 家族介護者へのフォローを手厚くすることは、認知症の人へのフォローにもつながるので重要。

# ２　関係団体等の意見　問２－２

| 問２ | 認知症の方が地域で生活し続けるために、社会として充実や改善していくべきことは何だと思いますか。（共通） |
|---|---|

【社会参加】
- 認知症の人への就労支援を行うことにより、認知症の人の症状や生活リズムの改善、企業の人手不足の解消などを図っていけると良い。
- 企業の職員が認知症になっても仕事内容に配慮して勤め続けることができるように社会全体の意識が変わると良い、長い目で見れば企業の強みになる。
- 認知症の症状が軽い人は役割意識がある傾向があるため、そのような人たちを活用できる社会になると良い。

【早期把握・早期対応】
- 早期なケア・医療につながっている人は、進行が遅く重度化しにくいと感じるため、怖がらずに医療や介護につながってほしい。
- 地域の人たちの気づきが早期発見につながるため、認知症に関して地域内ですぐに相談できるような場があると良い。
- 民生委員、地域包括支援センター、主治医の連携による、地域での介入、見守りの体制の構築。
- 病気の早期発見と対処のプロトコール（連絡の手順）ができていること。
- 認知症の比較的症状が軽く、薬の処方もしていないような症状の軽い人でも医療機関を受診し、継続的に経過を把握できる環境がつくれると良い。

【従事者スキルアップ】
- 地域包括支援センターを中心としたチーム支援に向け、スキルアップを図る上で、事例検討を積み重ねていく必要がある。チーム支援をしないと、その後の成年後見人の負担が大きすぎる事例が発生する恐れがある。

# ２　関係団体等の意見　問３

| 問３ | 認知症の方の支援にあたり、行政にどのようなことを期待していますか。（共通） |
|---|---|

【市民理解・地域づくり】
- 小・中学生の段階から、介護や認知症等に対する偏見をなくし、介護を身近に感じてもらうための取組。
- 議論していることが実質的な意味を持てるよう、実働的で活動していけるような人員・組織的配置をしてほしい。例えば、専門職による小・中学校での認知症の教育などの啓発活動に対する支援。
- 専門的な支援が必要な部分と住民同士の支え合いで支援できる部分があるため、住民同士の支え合いの範囲を広げていくこと。
- 地域の人との話し合い・関わり合いができる場があり、様々な情報のやり取りができると良い。

【家族支援】
- 介護保険サービスだけでは補えていない部分として、デイ終了後、夜間（22時まで）預かるサービスがあれば、就労している家族の負担軽減につながるのではないか。
- 認知症について知りたい人は多いのに、知る術は乏しい。
- 家族介護者の経験談を聞きたい人は多い。

【社会参加】
- 認知症の人への就労支援に向けた仕組みづくり。

【従事者スキルアップ】
- 認知症の人をどう継続的にフォローしていくかについて、専門職がスキルアップしていくための研修等を行うことが大事である。

# ２　関係団体等の意見　問４

| 問４ | その他、認知症支援の推進に関することで、話したいことや疑問点等思うことなどを教えてください。 |
|---|---|

【市民理解・地域づくり】
- 認知症へのイメージは、以前と比べて変わったと感じる。

【家族会支援】
- 家族会の運営は資金的な面が困難である。
- 前向きで活動意欲のある認知症の人の家族介護者同士で、家族会が作られると良い。

【従事者スキルアップ】
- 医療的ケアを求める家族や医療等の様々な知識を持つ家族が増えてきており、従事者に医療に関した知識も含めた研修を入れていかなければならない。

【その他】
- ケアマネジャー自身が相談できる場がない。シャドウワークへの線引きも知識のある立場の人からアドバイスをもらえたらと思う。
- 在宅医療が重要視されＡＣＰ（人生会議）等の活動も大切となってきている中で、認知症に対する取組がやや足りないように感じる。在宅医療と認知症に対する取組は同じ土俵にあるはずなので、バランスを考慮し、認知症に対する取組についてももう少し考えてほしい。

# 関係団体等ヒアリングから見えてきたこと①

| キーワード | 考えられる方向性 |
| --- | --- |
| 市民理解 | • 若者（児童・生徒・学生）の認知症を学べる機会の確保<br>• 認知症を含む高齢者との交流機会の創出<br>• 多様な主体による認知症の普及啓発の促進 |
| 地域づくり | • 認知症の人と馴染みの地域や居場所でのチームオレンジ化<br>• 認知症に関心のある企業や店舗のチームオレンジ化<br>• 認知症になる前からの地域のつながりづくり（生活支援体制整備事業や社会福祉協議会事業関連） |
| 本人への相談支援 | • 認知症の人同士が交流する機会の確保<br>• 支援機関（認知症疾患医療センター、地域包括支援センター等）に相談が入りやすい体制の構築 |
| 家族支援 | • 認知症の人との接し方を家族が学べる機会の確保<br>• 介護経験者の話を聞ける機会の確保<br>• 介護事業者が家族の悩み等を早期に把握する体制の構築<br>• 介護保険サービスにつながらない人の家族へのチーム支援の構築 |
| 早期把握・早期対応 | • 民生委員と専門機関の連携の強化<br>• 早期に医療機関につながりやすい体制づくり<br>• 専門機関（認知症疾患医療センター、認知症サポート医）の周知 |

# 関係団体等ヒアリングから見えてきたこと②

| キーワード | 考えられる方向性 |
| --- | --- |
| 社会参加 | • 認知症の人同士が交流する機会の確保（再掲）<br>• 認知症の人への就労的機会の確保<br>• 若年性認知症の人の活動機会の確保 |
| 意思決定支援・権利擁護 | • 成年後見制度の利用に円滑につながる体制づくり<br>• 元気なうちからのＡＣＰ（人生会議）の推奨 |
| 従事者スキルアップ | • 介護事業者間連携による研修の機会の確保<br>• 介護従事者が、認知症の人への適切な接し方、医療的知識を学べる場の確保<br>• 認知症の人の意思決定支援に係る事例検討等による支援者のスキルアップの場の確保 |

次第４　議題

（１）認知症施策推進計画策定について

ウ　本人ミーティングで得られた本人・家族の声について

# 令和７年度　本人ミーティングの実施概要

| 月 | 場所 | 内容 | 参加人数（本人） | 参加人数（家族） |
|---|---|---|---|---|
| 5/19 | 市立病院 | 回想法・フリートーク | 11 | 12 |
| 6/16 | 市立病院 | ころばん体操・フリートーク | 9 | 10 |
| 7/28 | 市立病院 | ころばん体操・グループワーク | 10 | 11 |
| 9/22 | 市立病院 | 音楽療法・グループワーク | 13 | 11 |
| 10/20 | 市立病院 | 回想法・フリートーク | 11 | 11 |
| 11/17 | 医師会館 | ころばん体操・フリートーク | 13 | 13 |
| 12/15 | 医師会館 | グループワーク | | |
| 1/19 | 医師会館 | グループワーク（予定） | | |
| 2/16 | 医師会館 | 未定 | | |
| 3/16 | 医師会館 | 未定 | | |

# 本人ミーティングで得られた本人の声（５月～10月）

**【本人同士、語り合う場について】**

・病気の話をするより楽しくてよかった。
・自分は冗談をよく言うので、笑ってくれると嬉しい。
・初めは来るのに抵抗があったが、３回目となると慣れてくる。
・急に「喋って」と言われると緊張して話せない。

**【日頃の生活の工夫・困ること】**

・運動する機会が少ない。
・セルフガソリンスタンドに行くとパニックになる。
・認知症の薬を飲むようになった。けど自分は自分、何も変わらない。
・忘れないようにスマホでメモを残してチェックしている。

**【今後の暮らしについての希望】**

・ずっとお家で家族と生活したい。
・認知症になっても働ける場所が欲しい。
・若い世代と交流したい。技術等を伝えたい。
・今まで続けてきた好きなことを続けたい。
・人の役に立ちたい。
・認知症だからできないことや覚えられない事もあるが、今まで経験したことのない新しい仕事をやってみたい。

# 本人ミーティングで得られた本人の声（５月～10月）

**【周囲や地域社会に望むこと】**

・せかさないで、ゆっくり関わって欲しい。
・認知症の人は何もわからない人だと思わないで、特別視しないで接してほしい。
・すぐに忘れてしまうけど怒らないで、優しく声をかけてほしい。
・「認知症って特別なことじゃない。」ってみんなが思えるといいなあ。
・認知症であってもそうでなくても、困っている時に手伝ってくれる、手助けしてくれる、
そんな街になって欲しいと思う。

# 本人ミーティングで得られた家族の声（５月～10月）

**【家族同士、語り合う場について】**

・参加したことで、以前とは違うことを受け入れることが出来て、前に進めた気がする。
・同じ介護者の立場から体験談を話し合うことで、互いを理解しながら一緒に対応を考えてくれる。
・アルツハイマー型認知症の診断を受けて間もない介護者の悩みに対して、経験豊富な家族があたたかくアドバイスしてくれて嬉しかった。

**【認知症介護について】**

・１日の中でも５分前のことを忘れていたり、覚えていたりするので、どんなときもエンゼルではいられない。
・携帯の電話に出たり、LINEをすることが出来なくなった。散歩に行って帰ってこない時に、連絡しても出ないのでどこにいるか心配になる。
・自分中心ではなく、相手のおかげで今の自分がある。相手と共に歩んできた人生を振り返って、感謝して接するようにすれば、心が落ち着いてくる。
・本人の気持ちも分かるが、うまい言葉で返せない。
・自身にとっての程よい距離感をつかむ。

**【認知症の診断・治療について】**

・認知症だと分かって楽になった。
・診断されるまでが一番辛かった。
・レカネマブについて詳しい話を聞いてみたい。勧められているがどうしたらいいか判断に迷っている。

# 本人ミーティングで得られた声から見えてきたこと（5月～10月）

## 【本人】

- 家で家族と暮らし続けたい
- 人の役に立ちたい
- 働きたい
- 新しいことにも挑戦したい
- 本人同士楽しく話したい
- 若い世代と交流したい
- 認知症だからと特別視しないで
- 優しい声掛け
- 困ったときは手助け
- 急かさないで、待ってほしい
- 安心して利用できる店（わかりやすさ、使いやすさ）

**安心して自らの思いを語り、支え合える場**

⇒

**前に進むきっかけ**

## 【家族】

- 診断されるまでの辛さ（支えがほしい）
- 先輩からのアドバイス
- 対応方法・試行錯誤
- 本人への感情（心配・イライラなど）
- 以前との違い（変化）を受け入れていく
- 相談できる場（１人で抱え込まない）